

---

# 俺と魔導と錬金術と百合と薔薇

三度の飯より甘いもの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と魔導と錬金術と百合と薔薇

### 【Nコード】

N7558X

### 【作者名】

三度の飯より甘いもの

### 【あらすじ】

間違いで殺されたとかではなく、因果律が狂ったことにより助かる命を落としてしまった主人公。主人公は異世界に行くことを望み転生を果たした。彼はどんな道を紡ぐのか……。とりあえず、更新は不定期です。

ぶろろーぐ？（前書き）

やっちゃった……。

他の作品を書き終えてないのに新しいの書き始めちゃった。

とりあえず、どうぞ！

ぶるるーぐ？

えっと・・・

初めまして・・・

この物語？の主人公？の美羽です。

俺は今凄い瞬間に立ち会っています。

・・・

なんと、神様が目の前にいるんです。

えっ？

あの！手にしている物をおろして下さい！

あっヤメテ！どこかわからないけど掛けないで！

別に頭のネジが飛んでる人じゃないでうから！

あっ・・・噛んじゃったじゃないですか・・・。

ちよっ、そんなほのぼのした空気はヤメテ！

地味にイタイから！

うっ・・・ううん・・・と、とりあえず話を戻します。

えっと、今日の前で中年のなんか光ってるオツちゃん（神様）と

どす黒い光？というか闇を出している綺麗なお姉さん（女神？）が・

・

あのシューティングGAMEもなんのそのといった弾幕の応酬を繰

り広げているんですよ。

なんか、目が覚めると少し離れたところで手から火炎放射してる人とそれを必死に手に持った何かで防いでて、こっちが気付いたことに気付くと「すぐ終わるから待って！」と言って「避けるな！あんたそれでも神かぁー！！！」と叫んでた。

それで、とりあえず・・・目の前の非常識な人たちを神様と思いませんでした。

えっ？

何故そんなとこに居るかって？

うーんと、説明すると・・・死んだから？

とりあえず話を聞こうにも目の前の花火のような光景が終わるまで無理ですね。

そんなこんなで弾幕の応酬が終了。

女神？さんの勝ちです。

長かったです。

めっちゃイイ笑顔でこっちに近づいてきます。

「いやいやー、ごめんねえー待たせちゃってー」

「えっと・・・別にいいですよ・・・」

だが、彼女の・・・後ろにある黒い物体について聞きたいけど怖い。

「それで・・・なんであなたがここにいるか聞きたい？」

「ええ、出来ればお願いします。」

「わかったわ！それじゃ説明するわね。」

「はい。」

「とりあえず・・・」

あなたの名前は満田美羽、18歳、男性、死亡時刻：18歳7カ月12日5時間42分29秒、  
死亡理由：後ろから女性に襲われ刺されてそのまま失血死・・・で構わないわね。」

「ええっ・・・とりあえずは。」

一瞬ストーカーかと思ったが、女神？さんの眼が泣きそうになったので思うのをやめた。

「そっ、それはよかった。

ここからが本題ね。」

「はっはい！」

「実はあなたは死ぬはずじゃなかったのよね。」

「はい？」

「本当ならあなたが刺されてすぐにあなたの妹さんが駆けつけてあなたは助かる予定だったのよ。」

「はぁ……」

「それがうちの馬鹿があなたの妹さんを間違えて殺しちゃったのよ。」

「はっ？もうとを……？」

「あつ、大丈夫大丈夫！苦しんでなんかないし、それに色々な特典付けて生き返らせたから。もちろんあなたが生きていた世界よ？」

「……妹がそれでよかったなら構いません。」

「それで……あなたなんだけど……妹さんみたいに生き返らせることが無理なのよ。」

「えっ？何ですか？」

「妹さんは神による殺害で、あなたは普通に殺されたからよ。」

「俺は……どうなるんですか？」

「そうね・・・とりあえず・・・もとの世界とは違う世界に生まれ変わるのはどうかしら?」

「・・・違う世界?」

「ええ、あなたの世界とは違う世界よ。」

「行ってみたいです。」

そんな提案を受けて、承諾したときに女神?さんの後ろからポロポロの神様?が現れた。

「あら・・・もう復活したの?」

「すまないすまないすまないすまないすまないすまない e t c e t

c . . . . .」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふっ、斜め45度!」

ゴツ!!!!!!

「ぐはぁあああぁー!!!!!!!!!!!!!!!!?????????

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ?ここは?」

「正気になった?」

「あっああ」

「今ねこの子に異世界への転生を提案してたのよ。」

「あつああ、そうなのか・・・君にはすまないことをした。」

怖っ!?!なに?あの手刀?完全に今、首折れてたよね?  
すぐに戻ったけど・・・。

「べつ別にかまいませんよ・・・妹が無事ならば・・・」

「うづう(泣き)君はなんて家族思いなんだ!」

「そうねえ・・・可愛いわよね・・・」

えっ・・・いや・・・ただ妹が許したんならいいかって、思った  
から言っただけなんだけど・・・。

「よし!君には最大7個までの願いを聞こう!」

うん、まあ聞いて貰えるんなら聞いて貰おうかな?

「じゃあ、一つ目:俺の家族に幸せを、

二つ目:俺の友達とかにささやかな幸せを、

三つ目:転生する世界は魔法とか錬金術とかがある世界で、

四つ目:転生するとき性別を女で、

五つ目:魔法と錬金術の知識をその世界のすべて、

六つ目:自分のステータスを確認できるように、

七つ目:今のままの記憶と人格を保ったまま転生したい。」

「・・・いいだろう、だが、最初の二つは言わなくてもするぞ?」

「そうよ、あなたが生きる上で必要だった運の全てはあなたの周りに重要度の差はあれど流れていくんだから。」

「そういうことだ。」

「はぁ・・・」

「まだ、二つあるわよ?」

「正直もういいです。」

欲しいものなんてもう無いしなぁ・・・。

「えっ・・・いいの?ほんとにいいの?」

「謙虚だな。」

「ええ・・・正直もう貰いすぎのような気がして・・・  
そっだ、なら二つは任せます。」

「そう・・・なら、転生してからの楽しみね」

「いいのか?いいのなら転生させるが?」

「ええ、構いません。色々ありがとうございました。」

「いいのよ・・・悪いのはこいつなんだから。」

「そのことは本当にすまなかった。次からこのような事がないように気を付ける。」

「はい、そうしてください。」

「それでは送る。」

「またね」

なんか身体が満たされていくと言っか、大気に溶けていくと言っか、よくわからない感覚が俺を包んだ。

そして、だんだん、こう眠くなってきた。

見えるのは申し訳なさそうな神様と優しい笑みを向けてくる女神さまの顔。

あっ・・・名前聞くの忘れた。

また、会えるかな？

とりあえず、最後に言うのは・・・

「ありがとうございます・・・」

ちゃんと笑えて言えたかな？

目が見えなくなっって、感覚が薄くなっって、どこかに吸い込まれるようなそんな感じ。

ああ、出来れば幸せな人生になるといいな。

ぶろろーぐ？（後書き）

感想待ってます！

みんなちはペイペー（前書き）

私は・・・独り身・・・なんとなくカップルの描写を書くとき甘々になるような気がする。

恋人が欲しい今日この頃。

作者の心は捨て置いて、どっぞ。

## 「みんなちはスレイバー」

・・・あれ？

「ここは？」

俺・・・何してたっけ？

・・・。。。

転・・・生・・・？

ああ、そつだ転生したんだっけ？

でも、目は見えないし・・・手足も好きに動かせれない・・・。

もしかして・・・そついう種族に転生しちゃった？

いやいや、あの神様？がそんなミスをするわけなさそつだし・・・。

あつ・・・もしかして・・・まだ生まれてない？

それならここは・・・お腹の中？

そついう事ならこの居心地の良さもわかる。

なんだか昔、母さんに抱きしめられた時のような感じがする・・・。

ふああ・・・眠たくなってきた・・・。

も・・・う・・・むり・・・



頭が割れるようにイタイー!!??!!??!!?

なぜか猛烈に頭が痛くなった・・・。  
何かに締め付けられるそんな感じがして・・・あっ・・・  
もしかして・・・俺・・・生まれる？

ぐにゃああああー!!??!!??!!??!!??!!??

痛みがー降下していくー!!??!!??!!??!!??!!??!!??

ぬおおおおー!!??!!??!!??

・・・なんか・・・ヒリヒリすんねん。

いや、なんか通り抜けたとこヒリヒリすんねん。  
目が見えないからアレだけど。

というか、

見えたら一生後悔する気がする。

ぬおおー今腰ー!!??!!??!!

足ー!!??!!

痛くない!

・・・生まれたい。

痛くない・・・痛くないっていいね。

だけど、肌がヒリヒリしてる。

たぶん、生まれたばかりの赤ちゃんも味わってたんだろっな……。

パチンッ！

あう！

「おぎゃあ—————！！」

おう……泣きたくないのに泣いてしまう……これが本能か……。

「奥様！元気な女の子ですよ！」

ナースさんですか？

「おぎゃ—————！！」

「女の子……？よかった……。」

ほうほう……神様？願いを聞いてくれたんですね！

頭では考えられるのに……口から出るのは鳴き声か……。

「ほんとに……生まれてきてくれてありがとうございます……！！」

優しい声……慈愛に満ちてる。

……お母さん……こっちこそ生んでくれてありがとう。

「おにゃー」

あっ、いま可愛らしい声になった。

「アイシャーーーー！！生まれたのかい！？というか体は大丈夫！？」

「旦那様・・・慌てなくても平気ですよ。お嬢様は奥様の腕の中で、奥様自体も疲労以外は何ともありません。」

「おぎゃーーーー」

なんか疲れてきた。

赤ちゃんってこんなに疲れるんだ・・・。

「お嬢様！？と言うことは・・・娘か！それにアイシャが無事でよかったです！！」

お母さんの名前はアイシャって言うのか・・・。

「おぎゃーーーー・・・」

なんか泣き止んできた。

ついでに親がそろったみたい。

「ちよつと・・・ファイク？落ち着きなさい！私は大丈夫だし、この子も無事よ？」

お父さんはファイクと言う名前か・・・。  
聞き間違えたらバイクに聞こえる。

「そつ、そつだね・・・うん。初めての娘だから嬉しくて!という  
か、可愛いね!流石アイシヤと僕の子だ!」

「当り前よ!あなたと私の愛の結晶なんですからね」

うわー

お母さんにお父さん

なんだかとってもいい人っぽい!

まだ見えないけど・・・

というか、お父さん慌てすぎだよ。

いや、むしろラブラブすぎだよ・・・。

赤ちゃん産んですぐにイチヤつくとか・・・。

おかげで、ナースさん?助産師さんはあれから一言もしゃべってな

いよ?

あれ?

普通にこの声の二人をお母さんお父さんと思ってた。

うくん、なんだろ・・・

これが普通なのかな?

・・・つてあれ?

頭痛くなってきた。

考えすぎかな?

「あなた・・・この娘の名前はとうしよう?」

「・・・ミーヴィ・・・なんてのはとうかな?」

「ミーヴィ・・・いいわね。それにしましよ?」

・・・前の世界の名をいじった感じの名だ。  
たぶん女神？さん辺りが気をきかしてくれたんだろう。  
前世が何気に女性の名前だったのは気にしない。

「よし！この娘の名はミーヴィー！ハインブルグ家の長女だ！」

ハインブルグ・・・？

たぶん、家名かな？

「ファイク？ニースは？」

にーす？

「あつ・・・置いてきちゃった。」

ふああ

なんか眠くなってきた。

「あら？もうおねむなのね？」

「ふふつ、疲れたんだね。」

「そうみたい。」

「でも、産湯はまだしてないんだよね？」

「ええ、まだよ。」

「それじゃ、僕がしても構わないかい？」

「そうね、お願いできる？」

「任せてよ。」

「でも、寝ちゃってるから起こさないようにね」

「わかってるよ、僕らの天使なんだから。」

お母さんお父さん・・・まだ起きてるよ。  
意識だけけどね。

まあ、もう眠くてしょうがないんだけど・・・  
もう、寝てもいいよね？  
おやすみ・・・。

「あら、完全に寝たみたい」

「ホントだ。今は寝かせてあげようか？」

「そうね、でも、産湯は入れてあげた方がいいわ。」

では、また・・・。

「さん」はスイマー（後書き）

感想待ってます！

家族って幸せ（前書き）

なんだろう・・・ミーヴィがというかキャラが勝手に動き始めた。

書いてるとなぜか最初と違う流れになっちゃった。

これはこれでいいかも。

## 家族って幸せ

ミーヴィです！  
今は3歳です！

結構長かったです。

色々と成長したと思います……。  
特に成長したのは諦めることと我慢するのをやめた事。

だって元18歳だよ？  
赤ちゃんということは色々と垂れ流しですよ！？  
これでも前世ではファッションとか身だしなみにはうるさかったんですから。  
そんな俺にはあれは……。羞恥プレイ過ぎた……。

しかも結構美人の人ばかりが面倒見てくれるからもつと恥ずかしの  
なんのつて。

お母さんはちゃんと面倒見てくれるけどなんか忙しいそうでした  
いはメイドさんみたいなのが見てくれました。

3人ぐらいが見てくれるんですよ。

しかもみんな美人。

一人目はクール系なまさにお姉さまみたいな人でルージュって呼ばれてた。

たぶん、一番三人のお姉さんみたいな人だと思う。

二人目は胸が大きいおっとり系のゆったりした喋りが特徴の女の人でミリーって呼ばれてた。

この人の子守唄は好きだ。

ゆったりしすぎていつの間にか眠れるからだけど……。

三人目は小学生みたいにちっこい女の子でマリーって呼ばれてた。よく、ちっこいと言われて「私ちっこくないよ!? 種族の中では一番でかいんだから!」と言っていた。

あれ? 種族って? まっ、いいか。

まあ、今となつては恥ずかしい事なんてもう無いけどね。

ついでに、お父さんはめっちゃ頻繁に会いに来た。

お父さん……仕事してるの?

お母さんも顔だけは毎日出してくれた。

お母さん……急に横に現れるのはヤメテ……普通にびっくりするから。

……それは置いておいて。

俺にはどうやらお兄さんが居たみたい。

時どき美少年が俺の事を覗き込んでみてるんだ。

栗毛色のふわふわのサラサラした髪をした翠色の瞳をしたカッコいいよりも可愛いと言う少年だ。

いつも、頻繁に見に来て絵本とか読んでくれるんだ。

それに色々なことを話してくれるんだ。

今日は何の日だとか、騎士の話とか、お母さんとお父さんの秘密とかね。

メイドさんっぽい人たちも話はいろいろしてくれるんだけどね。

殆んどは寝物語だけど・・・。

時には部屋にあるものの名前が何かを教えてくれたり。

楽しい日は意外に早く過ぎて行った。

早くも時が流れて今はもう3歳！

ついでに初めて話した言葉は「大好き。」でした。

いやー、お母さんが言ってみて言ってみて！と言うもんだから言っちゃった

そしたら、お母さんは鼻血を流しながら喜んでました。

お母さん・・・あれだけど・・・鼻血をだらだら垂らしながら近づいてくるとかなり怖いです。

あと、メイドさんっぽい・・・もうメイドさんでいいや。

メイドさんも軽くうつむいてた。

あれ？なんか赤いものが地面に点々を描いてる・・・。

あれ？おかしかったかな？

話を誰からか聞いたのかお父さんがやってきた。

お父さんはお父さんにも言って言って！と、お願いして来たので。

「やつ！」「つと試してみた。

絶望したような顔をして涙を流しだしたのが面白くて少し見てから「好き！」

そう言ったら、絶望した顔に笑顔が戻り俺を抱き上げてくるくる回りだした。

楽しかったと言っておう。

あとでお兄ちゃんはこのっそり来て言ってみてと言ってきたので「ちゆき！」と試してみた。

嬉しそうにしながら出て行ってしまった。

ああ、今度の人生は家族に甘々になりそうだ。

それも、楽しいか。

家族って幸せ(後書き)

感想お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7558x/>

---

俺と魔導と錬金術と百合と薔薇

2011年10月21日09時02分発行